基 調 講 演

“元気集落「高齢化60%」からの挑戦”

～ 共生・協働のまちづくり ～

田　代　昌　弘 氏

（特定非営利活動法人　プロジェクト南からの潮流　理事長）

皆様、こんにちは。

こんな高い席からごあいさつ、こんな話をする機会はほとんどないんですけれども、今日は、高齢者を中心とした地域貢献活動団体表彰式ということで、いろんな賞をいただいた方、本当におめでとうございます。

私どもの先輩方がこうして地域にしっかり根づいて、いろんな活動をしていただいている。それこそが地域興し、地域づくりの足元、骨太のしっかりした活動が、地域が本当に支えられているというか、そういう意味では本当に敬服いたします。本当におめでとうございます。

今日は、今ご紹介がありました副理事長の田端、そして事務局長の田代、３名で参りました。

私どもの活動もこうしてちょっとにぎにぎしくご紹介いただきましたけど、まあ大したことなくて、どこにもあるような活動でございます。その一端の事例というか、基調講演というよりも活動報告、今の途中段階。エンドレス、時代はエンドレス、人生もエンドレス、いつまでも変わりない、繰り返し繰り返し。皆さんが、私たちが活動していて次へバトンタッチしていく。そしてその次へと。そういう時代がこんこんとつながってきたわけでございます。そういったことの私どももつなぎ役と思っております。皆さんも、もちろんそうです。その先輩方でもございます。お恥ずかしいお話もありますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、“元気集落「高齢化60%」からの挑戦”。

鹿児島県は南さつま市、１市４町で合併をいたしました。少子高齢化、どこでも一緒です。町なかでも一緒だと思います、ある意味ではですね。そういったときに、私たちは何をすればいいか。それぞれの地域で、それぞれの持ち味を生かして、身近なことからしっかりやっていく。そのことがとても大切だなと私どもの仲間と一緒に考えながら、事を、行動を始めたわけでございます。

それでは、私どものプロフィールを少しご紹介させていただき、旧金峰町大坂長谷集落の活動に入って、パワーポイントの後に、総務省のほうで作っていただきましたＤＶＤの映像、そしてフィニッシュということにさせていただきます。

〔パワーポイント開始〕

この砂像はわかりますよね、「吹上浜砂の祭典」。私は青年団活動、そして地域での青年会議所の活動のスタート。吹上浜には何もないなと、何か有名なのは、有名と言うより皆さんご承知のように拉致事件がありましたね。まだまだ今、大変です。あの吹上浜です。南北47キロ、そのたもとでございます。当時、池田製菓が六百数十億円負債を抱えて倒産いたしました。ご承知でしょうか。そのころ、私ども若い者たちでいろんなことを考え、行動を起こしていこうよということで、吹上浜、ただの砂、されど、一粒の小さな粒が大きなこの大地を形成しているんだということで「吹上浜砂の祭典」をスタートさせたわけでございます。

これは、私がスタートからでしたけれども、本部長を８年ほどさせていただいたころの写真でございます。砂の祭典に私どものＮＰＯ法人は深く関わらせていただいております。その企画・運営、いろんなことに行政とも一緒に、地域と一緒に進めております。

こうして砂像は多くのボランティアでつくられております。

こうして花も一つの脇役ですけれども、外国のアーティストも一緒に、そして市民の大勢の皆さんと植えつけ、加世田常潤高校、高校生も一緒にやっております。

そしてもう一つの活動は、ＮＰＯ法人を結成してから「環境の森」、この吹上浜も松くい虫といいますか、松の材線虫にやられてほとんど枯れつつありました。抵抗松というのが出てきまして、完璧ではないんですが、これをずっともう十数年植え続けております。その企画・運営をさせていただいております。

こうして３月に植えつけをしております。

これは竹田神社、夏の三大祭りと言われています。夏祭り、島津日新公、その「いろは唄」シリーズをこうして具体的に市民に啓蒙活動をしていこうよということで、灯籠もつけたり、子どもたちの参加もしてもらっています。

これは、今お話ししました加世田麓、麓という地名はどこでもありますね。当時、藩政の時代、お殿様を含めてこの加世田にも麓集落がございました。当時の絵図面と今の市街地の様子。赤く塗っております、あるいは点々がお住まいでございますが、これが当時から、藩政、

明治、大正、昭和、150年を超える歴史を持つといいますか、そういう家屋が残っているものです。これをもっと保存・活用していこうじゃないかということも行動を起こしました。

次はこの益山用水路。当時は、お武家さんのお住まいのところをずっとかんがい用に稲作用に通した。出水にもございますね。当時のたもとにこうして武家屋敷がございました。

中の様子です。

そして私たちはその古い家屋、もう壊される寸前になった家屋を何とか残してほしいと。これは明治36年につくられた、藩政のときの武家門と中の家屋ですが、ここに「加世田麓歴史まちなみ研修館」を設置しようということで、ここで研修会とか、いろんなことを当時、興し出しました。

そして、研修会といいますか、専門の先生方をお招きし、文化庁もお招きして勉強会をしている様子です。

そして町並みガイドですね、観光ガイドをＮＰＯのほうで設置させていただき、約20名のボランティアガイドが誕生いたしました。そして今、いろんな活動、案内をやっております。そして、研修も多くの方がいろいろ訪れても対応ができるようになりました。

この動きは、入来にもありますし、知覧にもあります。伝統的建造物保存群指定地域に近い将来していこうと、そして、その風情をしっかり後世まで残していこうと、そういう制度事業に今、トライしております。先ほどの家屋は市のほうで買い取っていただき、修繕をすることになっております。本当に地味ですけれども、こういったことをやっていかないと、もう廃墟の里、町がほとんど変わるとちょっとおかしいじゃないかということで、大勢の方に協力していただいております。

これは、市役所のロビーを市のほうにご相談しました。もう十数年になりますけれども、ロビーをギャラリーにしようと、そしてこのことをずっと続けております。

この写真の画像はちょっと暗いですけれども、バレンタインデーの日には、私どもの先輩方がハーモニカクラブを作っちゃったんですね、ハーモニカクラブが楽しくここで演じて、非常に和む雰囲気に浸っております。いろんな市民の作品、いろんな催しを含めて、今、作品についても3,000名以上の方々がこのギャラリーに参加もしていただいております。つま

り、行政は冷たいもの、お役所に手続に行くものというよりも、ふれあいのコーナーをつくることによっていろんな方が訪れる機会が増える。そういったコミュニケーションの場にしていこうと、そういう手法でずっと管理・運営もさせていただいております。

これは砂丘地ですので、ちょっと種がありますね。ラッキョウです。砂丘ラッキョウを市民こぞって植えようよという運動を起こしまして、砂の祭典に行かれた方、ラッキョウも買っていただいた方もいらっしゃるでしょうが、これは実にサクサクしておいしいんです。これが９月に植えつけて、大勢でお役所の人も植えつけをして収穫、そして出荷というよりも、皆さん訪れた人にお分けするという、この仕組みをつくりました。

これは収穫のころですね。大学生も加わっています。

もう一つ、このコーナーで最後になりました。「いろは館」という施設、温泉センターがあるんですね。この施設を管理・運営委託を受けました。ＮＰＯ法人といってもやっぱり食えないとだめですので、運営できないといけない。いろんなことをということで、経営をしないといけないという責務もございますので、何とかこの施設をお受けして進めております。ここに高齢の方７名に勤務していただいております。

以上、私どもの活動の一端をご紹介させていただきました。

続けて、今回のタイトルでございます、限界集落もありますが、元気集落にしようということで、金峰町の大坂長谷集落の模様を出会いのところから、ちょっと赤い印がございますね、ここのところですね、鹿児島市の南部の県道鹿児島加世田線という20号線がございます。その県道沿いのこの辺、非常に境にございます、一番寒いところ。ちょうど２年前は60センチ雪が積もりました。錫山のお隣ですね、錫山の隣です。ここで活動しようというのが、１つの私どもの事業の中にまちづくりというところ、もう１つはいわゆる物を植える・育てるということを自分たちで勉強しようということで、そういう体験的なものをできるところを探しておりました。南さつま市は海沿いもあり、いろいろ特徴があるところでございますけど、山合いはどうも過疎であったり、非常にご高齢になったり、非常に目が行き届かないところでございました。ここことの出会いがございました。ここの出身者が私どもの友人で、「何とか自分のふるさとに元気を出したい。」と、「いろんなことをやりたい。」と、「だけど、１

人じゃ難しい。」ということでご相談があったのがきっかけでございました。

これは「稚児の滝」といいます。こんな滝があります。これがシンボルです。県道から２キロほど山合い、谷合いに入って行きますと、ここに出会います。万之瀬川の源流に近いところでございます。

この足元にはクレソンがいっぱい生えています。ここに水車がありますね。お地蔵さんもございます。５月には鯉のぼり、これはちょうどアジサイが咲いて６月ごろの撮影ですね。水が多いころでございます。稚児の滝、稚児が当時ここに飛び込んで白いハトになった。「何かうそをついたな。」ということで和尚さんに怒られた。「いや、卵を盗んだのは僕じゃない。」と、「そうじゃない。」ということで身を投げたと。そういったところで「稚児の滝」と称しているようですけれども。

これは梅ですね。遠くから見るとこんなところでございます。この辺はもう錫山です。この辺から向こうは鹿児島市です。ちょうどこの辺りが当時の錫山、錫の山ですので、坑口を通って、向こうの洞穴を通ってトロッコで運んで来て、当時藩政の時代にはここで製錬をやっていたんですね。木曽川治水の財源を島津藩がここで稼いで財源にしたと、当時は400人ぐらいここに住んでいたようですけどね。

これは菜の花ですね。水車と菜の花です。

これは秋の紅葉ですね。イチョウもありますし、紅葉が見事です。ですから、この町なかから、谷山の市街地からたった15分ぐらい上がりますと、ここに行けます。ほっとするんですね。マイカーで土日、いつも大勢の方においでいただきます。

こういったところですけれども、このグラフは見づらいでしょうけど、錫山地区は多くの集落がございます。集落の中でも県道沿いと谷向かい側、競艇場がありますね、ボートピアのあっち側の集落が12ほどございます。扇山、惣ノ木場、田ノ平、松葉江、阿久谷、大平、黄和田、長谷。400人ぐらいいたところですよ、当時。16世帯23名ですね。限界集落、この辺が100％もあります。こんなに大変な地域なんですね。県道沿いのところの大坂校区の

集落は約50%から60%なんですね。

いろいろ県の助成金をいただきながら調査をしました。アンケートもですね。「何が不自由していますか。課題は何ですか。」ということでまとめてみました。

高齢者の生活環境、働く環境、これはもちろんですけれども、もう一つは７番の買い物の便、これは高齢化になると困るんですね。今、デマンドバスというと、いわゆる定期バスというか、町のほうで出しているのが少し出てきておりますけれども、足元が不自由な人はそんな使えませんよね。福祉の施設サービス、道路と交通の便、特に買い物の便とか生活しづらいという部分がデータで出ました。こういった地域です。私たちは当時、もう６年前ですか、当時、非常にこの地域の方々は、アジサイがありました、菜の花もありましたけど、桜並木もあり、滝つぼが豪雨になったりすると、もういっぱい竹とか木株とかが運ばれて堆積して大変無残になっちゃうんですが、そういったものの除去とか、そしてさっき言いました桜とかアジサイとか、そういう植えつけをしたり、仲間意識がしっかりしているんですよね。そういった方々が、本当にすっと受け入れてくれました。別に私たちが鳴り物入りで行ったわけじゃなくて、何かお手伝いしたり、役に立つことはありませんかということで行った。こういったグループで一緒にいろんなことをやり始めたんですね。出会いから連携と、集落の方とですね、そういったことがスタートになったわけでございます。

まず、都市住民と農村との交流ということで、棚田が遊んでいるところを地元の方にご相談、お借りさせてくださいということで鹿児島市内のご家族、いろんなところに公募いたしまして、いっぱい入れないんです。だって、道路しか駐車場はないんですよ。点々としているんですよ。初めは12家族ぐらいでしたかね。もうずっと続いております。田植えから収穫までですね。

これはヒノヒカリ、そして先ほどの滝つぼのところにはニジマスを地元の方が稚魚を入れて、

ずっと餌をやって育てて、このころにちょうどフクフク大きくなっておりまして、これを子どもたちに釣ってもらって、そして焼いて召し上がってもらおうと、これもずっと続いております。

もうなるべくですね、田車押し、覚えていますね。はい、こんなことも体験する。これは草取りですね。

これはそうめん流し。手作りのそうめん流し。この地区の方々は実は水道はないんです。定期的に検査しますけど、山水をかめに入れて、それを飲んでいます。ですから、ミネラル分はいっぱいということですかね。

これは秋の収穫。この前、収穫を終わりました。新聞でご覧になった方はいらっしゃいますか。稚児の滝前で販売しております。

これはいわゆる掛け干しで、こんなことを全部体験してもらおうということですね。

さっき言いましたように１、２回は、まだ精米所で昔のようなザーザーザーとベルトでやるのがありますが、あれがあるんですよ。それでしました。

これは登り窯をつくろうということで、いろんな計画を立てたんです。これは国交省の「新たな公」という名前で、提案を出したら助成をいただいたものですから、散策路を用意しよう、そして登り窯をつくろう、そして道標をつくろうと、そんな計画をグループごとに、地元の方、若者、私たち一緒に会議をしているところです。

これは登り窯です。３連房式登り窯、土地はすべて地元の方からお借りしております。

年に２、３回、焼いております。体験ですね。

これは三日三晩ずっと地元の若い人たちといい

ますか、50代、Uターンが３名増えました。このサトシ君もそうだね。

そして三日三晩ちょろちょろちょろちょろして、ずっと温度を高めて1,200度まで達しないといけない。

これは散策路といいましたね、錫山の当時の様子をずっと、製錬所跡とかいろいろありますので、私どもの仲間、ボランティアガイドの会長福元さんがずっとご案内して、ツアーを企画いたしました。大勢の方々においでいただきました。

そして、いよいよここで手びねりの陶芸体験ですね。

これは地元のおばちゃんたち、おばあちゃんたちも含めて、手づくりのものを。これはおソバですかね、煮しめとか山菜の手料理を用意していました。

これは大学生がここにいますが、実は鹿児島大学の法文学部の学生さん、「Ｆｒｅｅ　Ｓｐｏｔ」という地域貢献活動をやりたいというチームがずっとその後にかかわって、もう毎年、年間通して活動していただきました。まき割りをしております。

これはシイタケに駒打ちをしております。これは今、600本、ものすごく１カ月前からすくすくとキノコが生えてきています。後ほど田端のほうから紹介があると思います。

これはソバ植え、これも大学生です。

これはソバ打ちですね。

いろんな体験ができるんじゃないかと。もう一つは、当時、カヤぶき屋根でしたね、私が小さいころはですね。その当時、この地域の方々は大平岳と称しましたけど、金峰山周辺よ

りももっと360度パノラマの土地、丘を征服しました。山払いして、大学生を含めて、開拓しました。眺望は最高でございます。これは当時の方々がカヤをとるための丘であったり、遠足の丘であったようです。そういったものをもう一回再現していこうということでこのことをしました。

これはニュースとかテレビで拝見されている方もいらっしゃいます。長谷いきいきおしゃべりクラブ、地元の方以外に周辺の集落も大勢の方、今、二十数名、毎週水曜日朝10時から午後３時まで、300円の食事代だけです。私どもの仲間がリーダーでずっと楽しくスポーツ、カラオケも時にはある。遠足もしたり、いろんなことを楽しんでもらっています。

結局こういったことは、地域で支え合う仕組みをどうやっていくかという仕掛けの部分だと思ってください。もうすべて、やっぱり国もそうだし、みんな地元で、施設に行けばいいじゃないかと、そういう時代ではないんじゃないかと。もう一回そのことを考えていこうよということをこの際やってみようということでやっております。

これはハーモニカも使っています。

元気ですね。もう笑顔で生き生きとなってきました。これは昨年の７月からスタートしたんですね。

これは西大山駅、開聞のほうに大勢で遠足に行ったんですね。

私たちは実は、今年の４月28日にこういった「大坂ふれあい館」という施設をつくりました。もっと元気になっていこうよと。大坂全体ももっと元気になっていこうよということで、シンボルになる交流の拠点をつくろうよと、たった20坪です。そこにテントをくっつけて。地元のじっちゃん、ばっちゃんのお野菜、コンニャク、クレソン、いろんなものを用意して、今オープンして何とかやりくりしております。

これもそうですね、４月28日オープニングのときですね。

市長さんも大勢、地元の館長さんとか大勢来ていただいています。

次は草花とか、フリーマーケットとかですね。

映像では以上でございますが、このようにしていろんな活動が積み上がっていこうと、ハイスピードでやっちゃいけないけれども、できる限り順序よくやっていこうと。よそ者が地

域に入っていって、あまりはしょっていくと、なかなか問題も起こることもありますが、これでもちょっとスピードを上げたつもりです。何とかこのことを地域全体の１つのきっかけに、これからのコミュニケーション、人の輪がもう一回つくられていかないといけない。よそ者も含めて、関わる仕組みがもっとできていく必要があるんじゃないかなということで準備したわけでございます。

こういった活動をずっと続けてきました。

それでは、ここで総務省のほうでつくっていただきました映像を見ていただければ、全体像がおわかりになろうと思います。

（DVD 映像の放映）

鹿児島県南さつま市長谷集落、いわゆる限界集落と言われるこの地に、毎週、大きな笑い声がこだまします。

「ワッハッハ、ワッハッハ、ピーチクパーチクひばりの子・・・。」

（放映終了）

（副理事長 田端順子氏）

皆さん、いかがだったでしょうか。おしゃべりクラブは２年ぐらい前にできあがりまして、できたきっかけは、米づくりとかソバづくりとかいろんな事業は大学生とか、元気な地元の集落の人で活動をするんですけれども、腰が痛かったり、脚が痛い人たちは来られないんですね。一緒に参加ができない。長谷というところは家が１軒あると、またその次の家までちょっと距離があるんです。山合いの中に、ぽつんぽつんとあって、そして間に空き家があったりして、皆さん見られてわかるように女性が多いです。平均寿命も女性のほうが長いといいますけど、ひとり住まいが多いんです。歩いて隣の人のところまで遊びに行くのも大変だしということで、先ほど出ました丸田さんに「みんなで集まったらどうだろうかね。」と言ったら、「それがよかど。」と言って、おしゃべりクラブは始まったんです。最初は「来る人だけでよかが。」と言って企画をしたんですけれども、だんだん増えてきまして、「会うだけで

いい。」と、「会ってしゃべるだけでもう本当に楽しい。」といって、ずっと毎週水曜日に続いているところです。

指導者も私たちのメンバーですけど、もうすぐ80歳に手が届きそうな元高校の体育の先生で一生懸命。自分と同じ年代の人たちへの指導方針が、比べるものはしない、みんなできるものをやろうということで全員がずっと続いています。手仕事とか何かつくるものとか、そういうのも大事かもしれないけれども、みんなが集まる環境をつくって楽しく過ごそうと、笑う会にしようという方針でやってきています。先ほど「おてもやん」を楽しげにされた方は87歳です。なぜ「おてもやん」かというと、熊本からこの山合いの大坂に嫁いでこられて、それで「おてもやん」なんですね。最初は立って、何か祭りがあるとすぐ「おてもやん」を若いときから踊っていたそうです。最近は立って踊れないので座って踊って、拍手を浴びているところです。ご覧のように、ちょっと化粧もしたり、ちょっとお洒落もしたりして皆さんやってきます。

私は今、大坂ふれあい館というところに毎日のように通っているんですけれども、一番の協力者は、いま見られた長谷のおしゃべりクラブの方々です。やはり絆というか、心配なんでしょうね、自分たちが。それで野菜を持ってきたり、里芋ができたと、「もう食い切らんで持ってきた。」と言って持ってくる方。「里芋を掘ったたっどん、運びがならん。」といって電話がかかってきて、大坂ふれあい館から車で取りに行ったりして、物産館みたいなものですので、100円の中に５個とか６個とか里芋を詰めて販売をしているんですけれども、新鮮だということで大変好評を得ています。

今日の南日本新聞に、「私の心にきらりと生きる、心に残る言葉」というので投稿があったんですけれども、読まれた方もいらっしゃると思います。あの「ひろば欄」はほとんど90%が高齢者の方だと思うんですけれども、毎回読んでいくとすごく感銘を受けます。

私の父は25年ぐらい前に亡くなったんですけれども、私にウサギとカメの話をいつもしてくれまして、小さいときからずっとしておりまして、私は順子なんですけれども、「順子、カメのように一歩一歩前に進んで生活はせんといかんたっど。あんまり走らんで一歩一歩していかんといかんのだよ。」と言って、ほかのことはあまりしゃべらなかったんですけれど

も、もう小さいときからウサギとカメの話だけしておりました。大坂のふれあい館をするに当たって、やっぱり時々その言葉が頭をもたげてくるんですね。「急いでしたらだめだよと。」、地域の方との絆も一つ一つ築いていく。野菜を持ってこられた方にも、大根も大きいもの、小さいもの、いろんな形があります。市場は規格で何センチ何センチとあるんでしょうけれども、一般に作る方は、自分が作ったものが最高なんですね。ですけど、見ると、脚が短かったりするんですけれども、「これは売りがなるもんやろか。」と言って持ってこられますね。そうすると、よく見て値段をちょっと落としたりして置いておくと、新鮮なものですので、すぐお客さんが買っていかれます。だから、すぐにだめというのではなくて、ちょっとずつ優しく接することが大事かなと思います。

今、大坂のふれあい館の売り物は、先ほど映像にも出てきましたシイタケの駒打ちを平成18年度からやっているんです。600本から700本の原木が長谷の山で生き生きとしているんですけれども、この１週間ぐらい前からシイタケが、にょこにょこと出てきています。原木シイタケで毎朝20個ぐらい、夕方も採りに行けばあります。そしてそれを売っております。このシイタケは、先ほども言いましたように地域の方々、ＮＰＯの方々、大学生、行政の方々が協働でつくったものです。そのきれいなシイタケが今、大坂ふれあい館の看板の１つです。

そして稲刈りも、稲も、植えたものを10月20日に「稚児の滝米」として販売をし、ソバも明日から新ソバで大坂ふれあい館で振る舞う予定になっております。いろんなことがありますけれども、一歩一歩前に進んで、いい大坂ふれあい館にしていきたいなと思いますので、皆さんもあの辺をお通りのときはお寄りくだされればと思います。（以上、田端順子氏）

お時間も来ましたが、またコンニャクが手づくりのコンニャク、得意種目で先ほどのおばあちゃん、おばちゃん、コンニャクイモが結構とれます。いろんな方がこれもオリジナルでいっぱい売っております。お通りの際はおいでいただければと思います。

先ほど、手づくりという言葉がございました。手づくりというのは、ものをつくることもそうですが、ものをやることも手づくり。そういう企画においても手づくり型に置きかえてみようよと。それは皆さんのノウハウにあるわけです。そして私たちに受け継がれて、そし

てそれを後世の子どもたちに受け継ぐ。そういったことがとても大事かなと思います。

リーダーに求められているのは、いろんなご苦労があろうかと思いますが、そこには１つの責任感もありますし、元気よく、楽しく、やる気を起こそうと。今朝は93歳のリーダーの方とお話ししましたけど、まさしくそんなところで、そんなところが私たちに欠けております。そういったご指導もどうぞよろしくお願いしながら地域をしっかりつくっていく、そういう源をお願いしたいと思います。

その町に５つキーワードがあります。町に長く定住、あるいは住み続けるには何が大切かということで、１つは足元にある、防災・安全。当たり前ですけれども、このことがとても大事な時代にさらに向かってきました。震災のことだけでなくて台風、いろんなものがあります。防犯も含めて、１つ、そのことがキーワードになります。

２つ目は健康。これも当たり前です。ご高齢になってきますと、足が、腰が、となります。健康の仕組み、地域においては２つ目。これも当たり前でございますけれども、うっかりすると、うっかりなっちゃうんです。

３つ目は経済。年金とか働き場とか、生活の糧があります。これはもう言うまでもないことでございます。

４つ目は快適性という言葉がございますが、やっぱり住んでいて気持ちのいい地域というのは快適性、そういった雰囲気をみんなでつくっていかないといけないんだと。このことをしっかり私たちは肝に銘じてやっていかなきゃいけない。独りよがりでもいかんし、木を切ることでさえもみんなで考えて、どうしようか。道端をどうしようか。みんなで花を植え、草取りはどうするとしっかり話し込んで､みんなが理解する方法。こういったことも快適性、精神、そして風景、いろんなものが絡んでくるんだということを考えていかないといけないのかなと思います。

最後に、５つ目は、やっぱり今日、皆様のキーワードにもございます、生きがい。生きがいをどうしてつくっていくの。明日はどうするの。楽しみは何なの。そういったこともみんなで話をしながら、役割分担して得意技を、得意種目をみんなで見つけ合って、支え合っていく、そういったことを、私どもはこうして長谷集落で経験して教えられたことでございま

した。

私たちは少しのことしかできておりません。ただ、いろんなことをやるつもりもございません。ちょっと何かをすると反応してくださる方々がいっぱいいる。そして、かえって教えていただき、学べる場を私どもは逆に教えていただいております。そのことを今日のまとめとさせていただきます。

地域が、地域をつくっていくということは、その地域の人々が当たり前ですけれども、楽しく暮らせるということと、誇りを持てると、我が町に誇りを持てますか、どうでしょうかということですね。そして、その足跡を将来の子どもたちにつないでいける責任を持てますかと。そういったことをお互いにかみしめないといけないことがあります。

経済の志向は、目的ではなくて１つの手段である。物の売り買い、物を育てる。それは楽しみのほうが先になったほうがずっと得なんですね。儲かろうとか、そういったことはその次にした方がずっと健康的かもしれませんね。

この前、新聞で前田さん、霧島市の文化財保護審議会の会長さんからのメッセージが新聞に載っていました。少し部分的に読み上げたいと思います。

「限界集落からの出発には、近隣の定住の出身者、ＮＰＯ法人、企業、大学生などと、もちろん家族､子どもたちとの連携や協働は必要不可欠であろう｡全国に散らばる出身者にメッセージを送る。そのためにも、帰れるふるさとをしっかり残してほしい｡」ということでメモがございました。

綾小路きみまろさんでしたか、「あなたのところに行きたい。でも、まだ早いから、もう少し辛抱します｡」と、そういったことのメッセージがありました。本当に感謝いたします。

つたない話、そして貴重な皆様方のお時間をいただきまして、少し私どもの活動をお伝えさせていただきました。

本当に長時間、ご清聴ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。